

4

関東甲信越ブロックのHIV医療体制

分担研究者 茂呂 寛

新潟大学医歯学総合病院 感染管理部 准教授

研究要旨

ブロック全体での全受診者数は11,417例、新規受診者数は1,048例で、東京都市圏内に90%以上が集中していた。診療の内容については、HIV/HCV重複感染への対応が進み、また新規治療薬の登場により、更なる治療成功例の増加が期待される。ブロック内での診療水準の均てん化を達成するうえで、各種会議、講演会の開催により、人的交流とともに問題点の共有化が望まれる。また、こうした場で発表の機会を持つことで、新たな人材の確保と育成により、診療体制の維持と発展を図る。長期療養時代を見据え、地域医療の担当者に向けた情報発信と、症例を受け入れる体制の確立を進めていく必要がある。

A. 研究目的

関東・甲信越ブロック内において、HIV/AIDS診療に必要とされる基礎的な知識の普及を図り、医療水準の向上に結びつける。さらに、医療機関同士の連携を強めるとともに、長期療養時代を見据え、拠点病院以外における症例の受け入れ体制を整備する。

B. 研究方法

1) HIV/エイズ症例の動向と診療実態の把握

関東・甲信越ブロック内におけるHIV/エイズ診療の実情を把握する目的で、エイズ治療拠点病院（124施設）を対象にアンケート調査を実施した。調査期間は平成28年10月1日から平成29年9月30日までの1年間を対象とし、調査項目としてHIV感染者・エイズ患者の受診状況について、受診者数（HIV感染者及びエイズ患者実数）、新規受診者数、血液製剤由来患者数、性別、病期、C型肝炎合併の患者数と治療の状況を設定した。

2) HIV/エイズ診療体制の充実

中核拠点病院連絡協議会、医療従事者を対象とした講演会、研修会、検討会を開催し、人的交流とともに経験と知識の共有を図った。さらに、院内および地域内におけるHIV診療水準の向上を目的とし、院内における研修会や、院外での出張研修を行った。

（倫理面への配慮）

アンケート調査の実施、臨床研究、講演会や検討会での症例提示にあたり、匿名化を徹底するなど、個人情報保護に十分な配慮を行った。

C. 研究結果

1. HIV/エイズ症例の動向と診療実態

アンケートの回答が107施設より得られ、回答率は86.3%であった。ブロック全体での全受診者数は11,417例、新規受診者数は1,048例で、東京都市圏（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県）は、全受診者、新規受診者ともにブロック全体の大部分を占めていた（それぞれ91.8%、91.2%）。さらに、厚生労働省エイズ動向委員会による平成28年エイズ発生動向報告の情報を加味し、ブロック内の新規症例数の年次推移と各都県の患者数を、それぞれ図1、図2に示した。

施設毎の受診者数で層別化したところ、100名未満の施設が大部分（80.4%）を占める一方、3施設で受診者数が1000名を超え、症例の集中が認められた（図3）。薬害被害者303例の受診先は28施設で、C型肝炎合併は220例（72.6%）を占めるが、その8割超が肝炎の治療成功例（180例、81.8%）であった。



図1 関東・甲信越ブロックにおける症例数
(2016年9月時点)

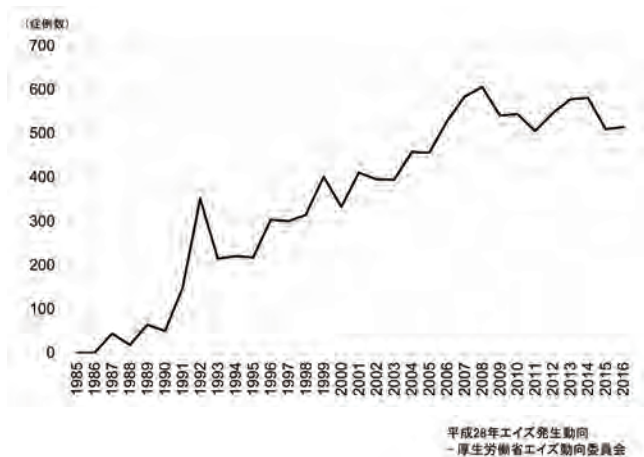


図2 関東・甲信越ブロックにおける新規HIV報告例の年次推移

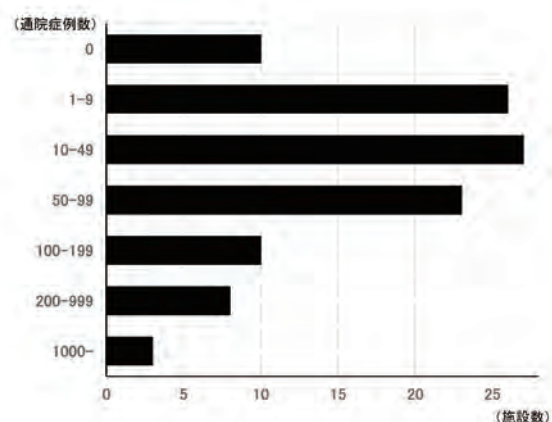


図3 各施設における通院症例数の分布

2. 会議・講習会・研修会の開催状況

● 第11回関東甲信越 HIV 感染症連携会議

特別講演1では、特定非営利活動法人 ネットワーク医療と人権 MERS 理事長 若生治友先生より「HIV 医療体制の20年、今後に期待すること」と題し、これまでの薬害エイズ問題の流れと、MERSの活動内容についてご紹介いただいた。特別講演2では、国立研究開発法人 国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター 田沼順子先生に「HIV 感染症診療の充実と医療体制のさらなる発展に向けて」と題し、安定期の抗HIV療法変更と今後の薬害 HIV 救済医療の展望について、ご講演をいただいた。

● 第18回北関東・甲信越 HIV 感染症症例検討会

第一部 一般演題、第二部 特別講演という二部構成をとり、前半の一般演題では、各施設から6演題の発表があった。内容は、外国人患者への対応、免疫再構築症候群、リハビリテーション、施設内での薬剤変更の取り組み、薬剤相互作用、他施設との連携など多岐におよぶものであった。後半の特別講演では、国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センターの木内英先生をお招きし、HIV 関連神経認知障害 (HAND) の病態と疫学について解説していただいた。

● 平成29年度関東・甲信越ブロック都県・エイズ治療拠点病院等連絡会議

東京都内で、エイズ拠点病院長 (管理・運営責任者) 及び診療責任者、エイズ診療に積極的に取り組んでいる医療機関の関係者、都県衛生主管部 (局) 長及びエイズ対策担当者を対象に開催した。講演は、1) 今年度の話題、2) 薬害 HIV 患者の長期療養に向けて、3) 救済医療の現状、4) ブロックにおける病院連携とブロック拠点病院の役割、5) 患者からの要望について、の5題であった。

● その他、職種別の連絡会議など

看護師の中でも初学者を対象に、第12回関東甲信越 HIV 感染症看護基礎研修会を新潟市内で開催し当施設の医師、看護師、薬剤師、臨床心理士、MSWの各職種による講演を行った。また、実務担当者による情報共有を目的に、北関東甲信越エイズ治療ブロック/中核拠点病院 看護担当者会議を高崎市で開催した。カウンセラーについては、都内で関東甲信越ブロックカウンセラー連絡会議を開催し

た。また、ソーシャルワーカーについては、北関東・甲信越地区エイズ治療拠点病院ソーシャルワーカー連絡会議を、薬剤師については北関東・甲信越HIV/AIDS薬剤師連絡会議を、それぞれ開催した。

3. 地域における活動

新潟県内の拠点病院以外の医療機関を対象に、希望があった施設に医師、コーディネーターナースが出向く、出張研修を計12施設で行った。医師、看護師がそれぞれの立場からHIV感染症とエイズに関する基礎知識を中心に解説した。また、在宅医療・介護の担当者を対象とした研修会、「HIV感染者・エイズ患者の在宅医療・介護の環境整備事業実地研修」を2日間にわたり当施設で実施した。さらに、世界エイズデーにあわせて、新発田市と新潟市のイオンモールでイベント「世界エイズデー新潟2017」を開催した。感染症の専門家と若者によるトークショーや、無料のHIV抗体検査が行われ、多くの市民が訪れるとともに、この様子は地方紙でも報道された。

D. 考察

アンケート調査の結果、北関東・甲信越ブロック内、全体の動向として、新規症例数は従来と同等であり、目立った増加傾向は認められなかった。薬害被害者の状況については、重点課題であるC型肝炎の治療が進み、新規C型肝炎治療薬の登場により、今後は更なる治療成功例の増加が期待される。引きつづき、ブロック内の状況について網羅的な把握に努めると共に、具体的な改善策を検討できるよう取り組んで行く必要がある。

地域毎の状況を比較した場合、首都圏への症例の集中が改めて確認された。厚生労働省エイズ動向委員会による平成28年の調査によると、新規HIV感染者では東京都（1位）、神奈川県（4位）、千葉県（6位）、埼玉県（7位）が上位に含まれていた。また、同調査によると外国籍の定期通院症例が首都圏に多いとの情報もあり、2020年開催の東京オリンピックを控え、今後の動向が注目される。一方、施設間の比較においても、担当する症例数に大きな差が生じており、今後経験豊富な施設に症例がさらに集中する可能性が考えられる。

こうした症例数、負担の格差を是正し、診療水準の均てん化を進めていくうえでは、各地域、各施設における診療の担当者が集まり、状況を確認するとともに、問題点を共有していくことが不可欠であ

る。このため、今年度においても、HIV/エイズ診療の担当者を対象とした各種会議、講演会を開催した。これらの会において、多職種間でのディスカッションを行うことに加え、職種ごとに集まる機会を別に設け、各職種内での議論の深まりを目標とした。北関東・甲信越の医療圏は、首都圏にくらべて症例数が限られる傾向にあり、症例発表会や講演会の開催により、知識と経験を全体で共有することができれば、ブロック全体での診療水準がさらに高まるものと期待される。なお、こうした会で今年はいくつかの職種から発表があり、また若手の演者が目立つ傾向が認められ、チーム医療の浸透と、世代交代を反映したものと考えられた。HIV診療体制の維持と発展のためには、人材の確保と育成が不可欠であり、こうした症例研究会や講演会は、若い世代が研鑽を積める場としての活用も期待される。

HIV診療を担う人材が世代交代を進める中で、現在の医療体制の原点である薬害エイズ事件の再認識もまた、重要な課題となってくる。このため、原告団及び当事者団体から、薬害エイズ裁判と和解、和解に基づく恒久対策について、ご講演いただく機会を確保できるよう留意した。今後も、こうした取り組みを継続していく。

なお、長期療養時代を踏まえ、拠点病院以外の医療機関にも今後は広く役割分担が求められるところであり、地域内においても出張研修などの機会を設け、知識の浸透を図った。各地域でこうした取り組みを継続していくことで、HIV/エイズ症例の受け入れ体制を確立可能と考えられる。

E. 結論

アンケート調査の結果、関東甲信越ブロック内で、新規症例数は例年と同等であったが、首都圏への症例の集中が継続して認められた。各種会議や講演会を開催することによりブロック内での知識、問題点の共有を図るとともに、今後の診療を担う若手の確保、育成を進める意識が重要である。種々の課題に対し、救済医療の原点を踏まえ、HIV診療のトレンドを把握しながら、こうした取り組みを今後も継続していく。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 原著論文

欧文

- 1) Plasma and saliva concentrations of abacavir, tenofovir, darunavir, and raltegravir in HIV-1-infected patients. Yamada E, Takagi R, Tanabe Y, Fujiwara H, Hasegawa N, Kato S. *Int J Clin Pharmacol Ther*. 2017 Jul;55(7):567-570.
- 2) A-DROP system for prognostication of NHCAP inpatients. Koizumi T, Tsukada H, Ito K, Shibata S, Hokari S, Tetsuka T, Aoki N, Moro H, Tanabe Y, Kikuchi T. *J Infect Chemother*. 2017 Aug;23(8):523-530.
- 3) Transfer of in vitro-expanded naïve T cells after lymphodepletion enhances antitumor immunity through the induction of polyclonal antitumor effector T cells. Tanaka T, Watanabe S, Takahashi M, Sato K, Saida Y, Baba J, Arita M, Sato M, Ohtsubo A, Shoji S, Nozaki K, Ichikawa K, Kondo R, Aoki N, Ohshima Y, Sakagami T, Abe T, Moro H, Koya T, Tanaka J, Kagamu H, Yoshizawa H, Kikuchi T. *PLoS One*. 2017 Aug 30;12(8):e0183976.
- 4) Clinical significance of interferon- γ neutralizing autoantibodies against disseminated nontuberculous mycobacterial disease. Aoki A, Sakagami T, Yoshizawa K, Shima K, Toyama M, Tanabe Y, Moro H, Aoki N, Watanabe S, Koya T, Hasegawa T, Morimoto K, Kurashima A, Hoshino Y, Trapnell BC, Kikuchi T. *Clin Infect Dis*. 2017 Nov 8.
- 5) Ikeno R, Yamada E, Yamazaki S, Ueda T, Nagata M, Takagi R, Kato S: Factors contributing to salivary human immunodeficiency virus type 1 levels measured by a Poisson distributionbased PCR method. *J Int Med Res*, 2017. doi: 10.1177/0300060517728652. [Epub ahead of print]

和文

- 1) 山田瑛子, 北村厚, 永井孝宏, 児玉泰光, 高木律男: 北関東甲信越地区在住の一般人1,092人におけるエイズ/HIVに関する意識調査. *新潟歯学会誌* 47(1): 11-16, 2017.
2. 学会発表
 - 1) 菌血症・敗血症の急性期における鉄代謝～鉄調節因子 Hcpidin25の動態をふまえて 番場祐基, 茂呂寛, 小泉健, 青木信将, 林正周, 坂上拓郎, 小屋俊之, 田邊嘉也, 菊地利明 第91回日本感染症学会総会・学術講演会, 東京 2017. 04
 - 2) 抗IFN- γ 自己抗体陽性播種性非結核性抗酸菌症の臨床表現型 青木亜美, 坂上拓郎, 吉澤和

孝, 島賢治郎, 青木信将, 茂呂寛, 田邊嘉也, 小屋俊之, 長谷川隆志, 菊地利明 第57回日本呼吸器学会学術講演会, 東京 2017. 04

- 3) 肺MAC症におけるサイトカインの網羅的解析 番場祐基, 茂呂寛, 青木信将, 朝川勝明, 林正周, 大嶋康義, 渡部聡, 坂上拓郎, 阿部徹哉, 小屋俊之, 高田俊範, 菊地利明 第57回日本呼吸器学会学術講演会, 東京 2017. 04
- 4) 真菌血流感染症における敗血症バイオマーカー Presepsinの挙動とその有用性 番場祐基, 茂呂寛, 里方真理子, 尾方英至, 小泉健, 青木信将, 林正周, 坂上拓郎, 小屋俊之, 菊地利明 第66回日本感染症学会東日本地方学術集会, 東京 2017. 10
- 5) 高齢者肺炎入院症例のADL低下の原因の検討 小泉健, 近幸吉, 里方真理子, 尾方英至, 番場祐基, 張仁美, 青木信将, 津畑千佳子, 佐藤瑞穂, 坂上亜希子, 茂呂寛, 井口清太郎, 田邊嘉也, 長谷川隆志, 鈴木榮一, 菊地利明 第66回日本感染症学会東日本地方学術集会, 東京 2017. 10
- 6) 外部機関との連携によるHIV陽性者就労支援 蔵田裕, 田邊嘉也, 川口玲, 古谷野淳子, 中川雄真, 茂呂寛 第31回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京 2017. 11
- 7) 抗レトロウイルス療法の時代における呼吸器疾患の合併に関するシステムティックレビュー 茂呂寛, 坂上亜希子, 佐藤瑞穂, 川口玲, 成田綾香, 蔵田裕, 中川雄真, 古谷野淳子, 田邊嘉也, 菊地利明 第31回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京 2017. 11
- 8) 北関東甲信越地域在住の一般住民におけるエイズ/HIVに対する意識調査結果 山田瑛子, 高木律男 第31回日本エイズ学会学術集会・総会, 東京 2017. 11
- 9) β -D-グルカン検査の院内導入が診療に及ぼす影響～抗真菌剤の使用状況から 茂呂寛, 坂上亜希子, 佐藤瑞穂, 津畑千佳子, 草間文子, 磯辺浩和, 青木美栄子, 内山正子, 菊地利明 第33回日本環境感染学会総会・学術集会, 東京 2018. 02

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし